

寛永諸家譜

藤原氏已四冊之因一  
利仁流

102

内閣文庫		
番號	和	20199
冊數	186 (102)	
函號	時 76	1



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak









加藤

寛永誌家系図傳

藤原氏

己一 小家

利仁流

加友

某

三無

先祖よりこのころに女玉之河を以て

長江と

浅草文庫



嘉明

ある物 後五位下

中園同前

之和九子京部小とひく後五位下

り叙と

寛永二年二條河原のとき約後

位と

同八年九月十二日伊予よとひて六十

九条にりて卒と

法名通譽

明成

武部少輔 中園山城

寛永十一年京部よとひく後五位下

小叙と

日日約後り位と

明利

氏部大將

之和二年正月十九日後五位下叙と



明勝 あきかつ

承之郎 うけたし

明友 あきとも

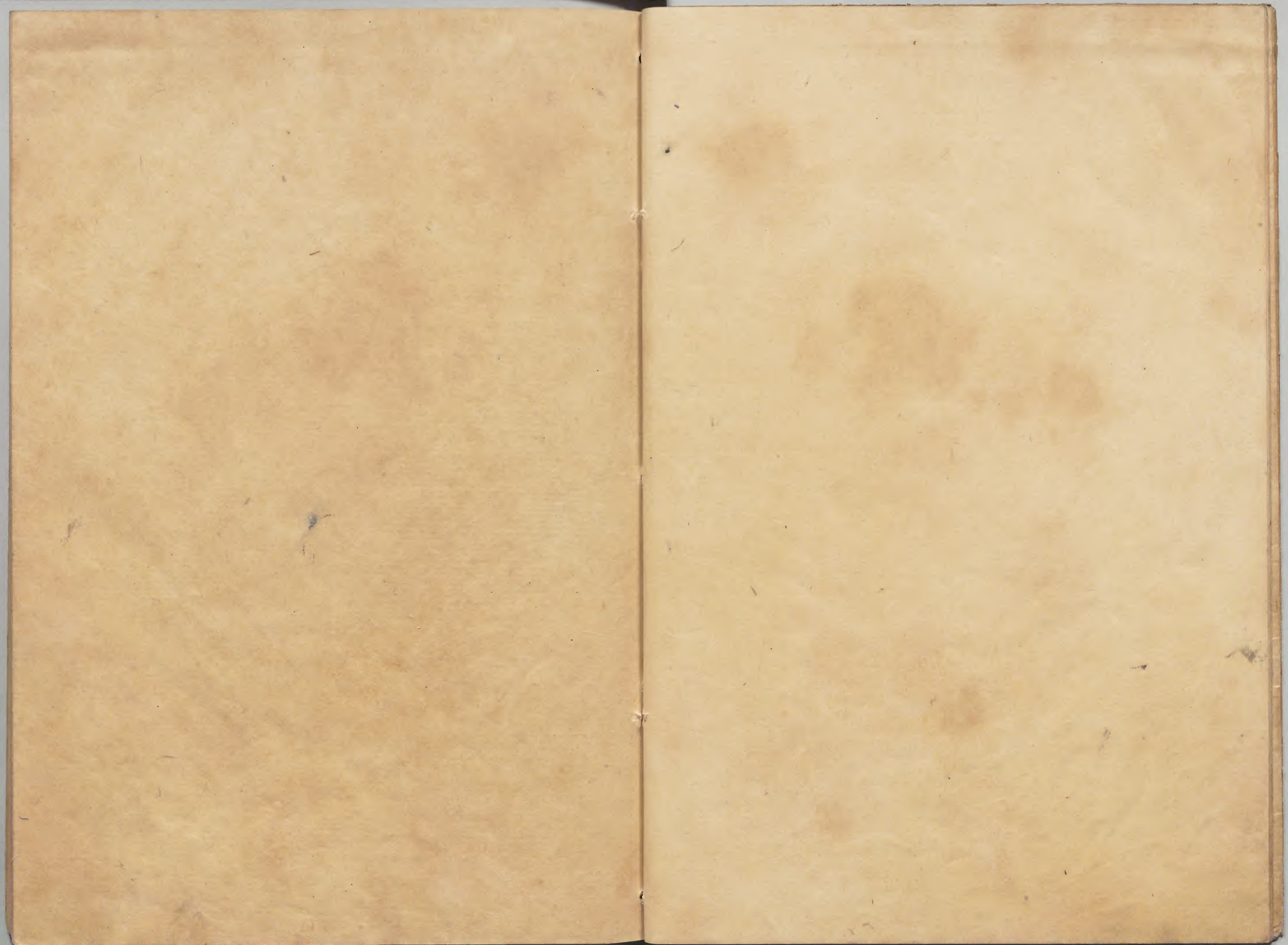
内藏助 うちざいすけ

寛永十三年十二月晦日つひ後五位下ごごいげ御

家紋けもん友丸ともまる

旗幕はたまくら紋もん十字じゅうじ文字







光泰

加藤

作内 後を江守と号して 中国英徳  
世、橋治店卒英の地を領す

光泰長子とて豊后秀吉

了、秀吉に別長濱より

海をわたりて横山の城を築塞



小とまりり初倉義系が城ひさひ  
て城おまゝとて教少くさ法士られ  
い味を守る光泰自らとくみく  
挑戦教ヶ取の志とかがありとて  
死せんともなりこころ竹中も兼尉  
城のととのぞくこれら奇兵  
を教一急り撃つて道と救  
このゆりり光泰おぬる事  
とゆえなりとくりそひく飲え

七百とてはるりと止ら力十余人と  
あつた  
天正六年秀吉播磨の城を別  
氏とせんとしそくにお体の弱よの  
て士卒よ若ていしく疾病なまび  
傷疔あつたおあさぶべし御  
里りののこころとてまるく賦税  
衆の事をほしむりしなりこの  
ごきえ泰法ていしく我に列乃



戦は勝と傷てより行方しるさう  
とどと尋常の軍入りてし  
やととくはあり憤と教し  
先延りしものいふ秀吉のいふ  
二本と藝列とは唇舌するに  
毛利は従無砂の浦は抛く無  
糧のゆとり二本の城をせし  
と策糧の道と絶より良るか  
ととくはあり先泰を

二本と高砂とのありあり多胡草  
といふ款の及成意し先泰寢食  
を口とし法率といふも入りし  
禦軍道より城中糧はととく  
守る事しつゝいふと別不  
又みもに自害し遂二本の城と  
はしつゝありて先泰播列  
よととくはありし地と領  
秀吉は築田務家と征せん



を以て越前の境よりとひく大よ戦こ  
き光泰軍忠とつら一徒兵おろく  
首級の四ありより母波玉岡山の  
城より徒一萬七千石と銘と又江が  
貝津の城よりつり又同玉高乃  
城より徒二萬石の比と銘と  
うらら又尾列大山の城よりつり  
又遠列大垣の城よりうららと  
百石の地とつらうら別よ二萬

石の代友職を司

秀吉越中國よとひく依内務助と  
征伐のとも光泰又軍切ありその  
後沙劔氣とつら大和入納云  
秀長より属一合邑一萬石を銘  
と少頃ありと和列宇多郡秋  
山乃城よりうら一萬六千石を  
銘一石丁ら事兼福をなす  
秀吉の原免とつら江列依和山



の城よりうり精米二萬石を  
り後小位下より叙せし聖子甲  
列二十四萬石を叙せ

文祿元年秀吉日本の兵を  
朝鮮國と征するも味方彼國よ  
後海する者援兵と請よるも秀吉  
婦をむび兵とまり大軍すてり教  
らんと此お耽但る守らむは光泰  
命とつけし海より軍おとて名後

危とおく朝鮮よととじかんうとと  
小纜と解の日

東照大指現うととげうとと後口り  
清平原ありと異域の形と首領  
且軍旅の事と治る海ふ光泰慨  
わりのく別をうととつらととてり  
朝鮮よりうり日本の治めと京城  
り會らうととと法めのい  
今糧とがうとと兵あり大助の兵と



又あり龍とともてとらうく軍兵と谷  
山浦よりかして事と名護屋  
うのつひ命と徳乃り侍人あま  
謀と廻り侍事と尖らう切らう  
まや光泰がいんくうの谷山浦を東  
のく京城と事と事と百里が宿なり  
こころとともて彼京城のくまら  
らるる——まうか友身路清正瑞  
か守主茂の解とと趣し

西のく教百里の介りあり今この  
軍京城とともてまらるる何ぞ  
清正とともて海軍とゆんや  
と京城りともひく清正と茂と  
なまなり徳乃のいんく清正と茂  
何連の口う海とらるる今糧つ  
わらり徳率何と命と彼と  
や光泰がいんくとらるる我一人  
海軍と清正と茂と約し



遂に権執の端とすすこよをひく  
大助の共入り龍衣来ぬ光泰法  
将り共くこれを撃つ一と  
しるふこころ入り法将曾て我攻  
事といふごとくして送りし極端  
とさけんとす光泰くは是とう  
けふともく立花右を将監と云紫と  
教していふく我攻を我祿とふこ  
る立花すくく先延とあらん也

なりこにをひく小島川隆系も又  
これり同らりりらく法将  
教く共福とすす共りけとさ  
味方の士率大助の共こをくひたよ  
克て首級之弟八子解とゆりこれ  
よらくめ人ほあり取ををま  
後加茂清正朝鮮王なむびよ太子  
と虜京改り来會はとく小坂  
陣のとれ光泰あ生浦小いり



て鴉毒りかり卒と多末十七時  
文祿二年八月二十九日なり

貞泰

作十郎

従五位下

右衛門尉

右近大夫

十四歳のころ父光泰卒と文祿四  
年甲列を考て濃列星野より  
四万石とあり

多末の石田三成誅叛と合つし

貞泰より

大権現は通一とあり才光と

人質として江戸より且飛舟

板四とあり忠節の旨とあり

大権現沙威のあまらし由書五通

まふあことんりい

あ通書状と板刀名光と前

原首尾すお忠節候感悦



今日玉小回原と相馬の急  
進之表可お急陣の跡を  
入情候肝要の事候也

九月三日家康沙判

加友在湯川野  
亦中丹後

切、入会書状候事、玉の珠大石

成之方は早、相海作  
海是作好又先自の急陣、由  
尤作今日玉于清見寺と急  
之旨候事、表可急陣候事  
旨の事候也

九月六日家康沙判

加友在湯川野



しつりといて

大権現の先延井伊長初少将及が指  
魔よ悪くそとむらひ日玉を回よ  
教向一入道の家は對陣と

大権現同玉系坂は伊本陣のやうさ  
貞泰の地は赴お禱もり又は列  
佐和山りといひ

大権現は禱しつゝやうりうごころり  
貞泰のいひは稲葉右京亮 釣命と

かうゆり長末大苑少将が居城ありとせ  
じ貞泰稲葉ありといひと  
ひあいの城はひふ取り長末一戦  
り及むらと城を捨て逃るる  
うはら

大権現の沙汰しつゝまはり大坂  
りい

まを十ふの伯列米子の城より  
二万石の領地といふまはり



四萬石より六萬石と銘を

日十九日大坂陣乃ちゆるさ松平

圓防守畧部内膳正木と陣と同一て

大坂陣と同一て大坂陣小を

松平武藏守と陣と同一て新橋口

よりともいさぬ

元和三年

名徳院殿の釣合よりして豫列大例の

城よりうつり給地りあり

日九年八月廿二日江戸よりいって卒を

歳甲申 法名玄雄

家紋 友丸蛇目

光世

年月 延五信下 遠江守 中園 在江

享長四年 林原式部大將 康政

とあり



大権現よりお福

日又海上松系橋と征伐

とくそ光忠病よ嬰

涉流よりらんせゆき八月十日

山より

大権現よ福 釣合

とかうゆり右河より船

をらう

このとき永井右近大吏 大久保

十兵衛尉より

扱持る

且又舟多舟下

いふ

本陣の温泉

とくそ光忠

とくそ

同年同系涉陣

日七子濃列



十一石の領地とす

日十九年大坂陣の時さあゆ

隼人正か継りし居して

し

寛永三年沙使者となり

將軍家より

同日正月五日従六位下叙せ

進を以守りし

同日正月二年と歳五

法名道珠

寛定

平内 生玉氏

寛永元年

將軍家より

同日沙

女子

加友信法



女子

同鴻乃太師が妻

女子

村上太師六浦尉が妻

女子

赤中丹後守が妻

恭貞

五郎八

のらお羽守と号す

十二歳のときさくら殿

名徳院殿

將軍家よお賜しそまつ

え和九子父貞恭卒と号す

名徳院殿

將軍家の教命とかりゆり亡父が遺

命豫列大例の如とお給す

寛永え子従五位下よ叙せし

お羽守り御給



世泰 よこや

織部 おりべ

十一景のとうとうとう

名徳院殿

將軍殿よおつて

女子

細川玄蕃頭が書 ほそぐわん かんごんのえ

家紋

上巳友の丸 かみ とも



常正

加藤

大御在清の尉

中國之河

廣忍いろはのり

天文十一年二月十七日乙十二辰

死を法名性悦 道号法名



皇子  
重常

小倉東門尉 生國曰お

享正四年

東照大権現よりくまら

元和二年

台徳院殿よりくまら

寛永二年十月十八日卒

死に 法名常心 道号則翁

皇子  
重正

勅助 生國をい

享正六年

大権現よりくまら

元和二年

台徳院殿よりくまら

將軍家よりくまら

寛永十年 作よりくまら 鉄炮同



ふ三十人とあけり

日年布衣と着せりゆり

重緒

橙正尉 生國武苑

貞永三年十月九日

名徳院殿より

同九月十九日

將軍家より

忠重

大正尉 生國日前

將軍家より

重長

牛正尉 生國武苑

重正や一子と云ふ

半七郎が子なり

寛永十一年

將軍家より



家紋

下<sup>こ</sup>夜<sup>り</sup>の<sup>ち</sup>丸<sup>ま</sup>



利正りせい

九郎次郎

又九郎右衛門のり三考さんこうと

利成りせい

新六しんろく末

生五伊勢せいごいせ

加友かゆう

利仁將軍りいにしやうじんの右衛門のえもんなり



生國日前

廣忠ひろたけつよつふまつりのち

東照大権現とうしょうよつふつふつとくまらる  
多良田たらだ四十八歳ふくむる

来

比祢丞ひねのせう 生國日前

来

比祢丞 生國日前

大権現おほごんげんよつふつふつとくまらる

元龜げんき三年を列りゅう之方のあたが原のり

とひくとひく後ご才さい源げん守しゅ郎らう一ひとはよ

討死うちし

正任せいじん

新田しんた末すえつ 生國日前

藏くら田た信のぶ長ながりつふ尾お列りゅうよ任にんを



正信

九郎次郎 生國冬河

大指現よりつてくまの系

永祿六年冬河よりとひく

徳とあはせ戦甲あり

え壺三子を御三方原に陣

のころこのかゝのりとをまふ

正信あだしくもばとらるりて

多しす戦場より死くは忠を

謝しそくまつらんそく終小

をそのとらる十二月亦百二十

歳よりく戦死と後の日武田

勝頼陣中より正信が戸懸を

さるい河原に東つ正次おひひて

これとらげとら

い外より正信事幼年より

大指現よりつてはる牧度の軍



わりと云く

某

源守郎 生國同あ

大捨現より 信久より之方原よ

とひく兄正信と行なりしうさこ

二十一歳よりく討死

女子

喜ぶ来つ尉正次が書こたふ長物

正幸が母なるを

正勝

源守郎 生國同あ

十一歳のころに

大捨現より

天正十一年尾列長久の戦場

よりとひく首級と討死

そのうち

台徳院殿より



大番の継以ついでこゝろ  
寛永十九年しやう沙汰さた炮乃玉茶の  
奉行しやうとつとも同どう心しん二十にじゅう八はち人を  
わけり  
寛永十四年九月七十四歳よ  
て死しす

正吉まさきち

令内しやうない

十六歳じゅうろくさいよりよりくくりりががたたれ  
名徳なとく陰いん殿でんとといいふ  
將軍家しやうぐんけよりよりつつくくままりりふ

正成まさなり

源げん守しゅ郎らう

寛永九年

將軍家しやうぐんけよりよりつつくくままりりて  
祖父そふ正まさ徳とくががままりりとといいふ



正次

長末の 生玉伊勢

信長より信之より一時的竹中  
号と

大権現より福よりつる時

正次を九郎次良利正が姪たるの  
あひびごころ中三列より後より  
こ乃 歳余ありゆより 永祿

十一月参列よりつる

大権現より福見より参り時 釣命と

かりより竹中とつるためわらび  
か友と称と

大権現を引出玉の時信之より

のち 伴よりより九郎次

正信死して子なきゆより正信

が妹と正次が妻と 飲比なび

り 是將二十人と西あけありて



正信が家督とほがしりてまふ  
正次を承る事お出の正任が子あり  
天正二年

大指現とて信長に武田勝頼に  
参列し長瀬に参りて合戦の  
際西次七捕灯のしり抱し柵  
際しをひく歌軍の勇士  
西次をうり共首級とゆき  
日七年を列井岩しをひく

味方引ちるさくの河原に  
かといひて浄徳の人とて  
森川合戦おつて西次おとより  
しりけし

大指現とてしりて友人と称す

日十二年尾刈長久平戦場  
しりて我いましりて  
歌とてしりて首級とゆき



らぞり合戦より乃ぞじのさき  
士卒ふつびく銃砲とんあし

しじ

大権現げまじりて沙威あり

日十八年園東入玉ありて二子

石の銃砲とこまふ

まよとふ年 教令ふりあひ

又騎よび銃砲の足怪ふ十人と

けりりく京郊所司代の職を

しじ

翌年事ありけり職を

しじ

同十八年卒ふりて

心重

表助

まよとふ年十六歳し

大権現より福しりて



くらと通侍と

日六年と叔系務と治中と

とみぬのころと修成とあびり

岡原陣より従なり内膳とつと

うにとひく送統とくも沙正

治ありとく伊戸より還沙志

とみふとつとりともひく桑地干石

とね領と

日六年又正次ゆへありて執事と

えりよりと正室と又執事と

とらりのころと

大権現殿命ありとかつとつと

とらまのころと

日十八年正次死と釣命と

父がき跡とつとるびと襖地のあ

卒とつらけらる

日十九年とえ和とと大坂と友友の治

陣より信守と



寛永九年与力入瑞をらげけ

まふ

同十年五十一歳に〜とあり

正之

彦右衛門

元和八年

名徳院殿よりお瑞を

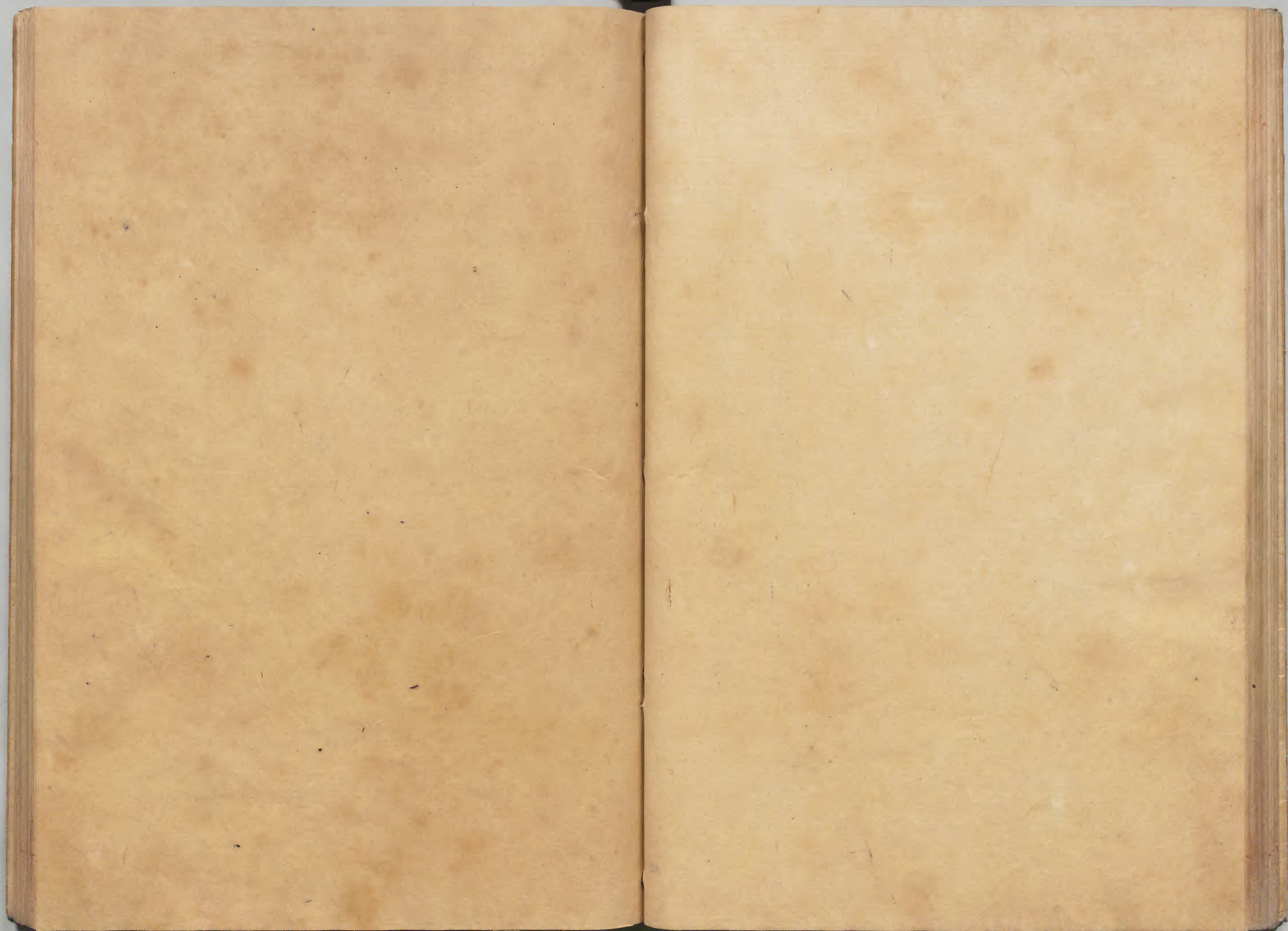
寛永九年二十歳に〜とあり

將軍家より瑞〜とあり

同十二年西小姓の毒をつとむ

家紋 下友の丸







加藤

氏次

助右衛門 生國冬河

東照大権現よりつとくまうつ

元和九年三月廿九日八十四歳

しつとくをて 法名 宗名



則勝

伊織 生四日前

十二歳ありて

名徳院殿よりつかりて

大坂陣のころ

寛永十二年三月十一日六十六歳

少くも法名若飲

則吉

掃部 的らぬ

生玉武彦

十五歳ありて

名徳院殿よりつかりて

元和六年

將軍家よりつかりて



則次

加兵清 生國回前

十三歲少

名德院殿 取福 十五歲

將軍家 了 了 了 了 了

家紋 下友



● 忠正

加藤

傳右衛門 生國冬河

目玉墨海

東照大権現よつて



正茂

茂在東門 生玉同あ  
思海よりとむく

大指現小つてくまつ

天正十二子 長久平涉陣小徳作  
款こあひとこれと討捕付時症  
をうりあふ不行安なる  
以徳俊と格うこれ食道とた

まふ

長久平子軍六歳よりく死を

正信

傳信 生國甲斐

正茂が書ひ子こなる久平八半奥減部  
昌次が子なる

昌次生國甲斐

天正十年めく



大指現より福一とくまつ

同十二年長久之陣より修守一

首級とゆより

長六年園原陣少もまこさ

かひとくまつ

長四年正信

大指現より福一聖

名徳院殿よつとくまつり奥列

陣より修守と

日十少子大坂山陣よ牧野内近从

信成が総りつたなるとくやく

首級とゆより凱旋の後水前

とゆよりとくまつ

え和五年後河大細言忠とつり

つけれ後府の書成つと

日十一年とくまつ

將軍家よつとくまつ



正ま總も

孫まごた忠ただの 生なま國くに武ぶ統とう

寛永十三かんえいじゅうさん年

乃軍家よりつゝさくすつ

家紋

友ともの丸まる



● 正成

民部大輔

美濃乃國よじゆら

加茂

光成

平大夫 生國回前

豊后赤松一守



文祿二年五月廿五日七十一歳  
〜死す 法名道心

成之

本居東門尉 生國回前

天正十三年

東照大権現より湯〜〜〜

小田原を〜び岡原陣より信

〜

慶長八年十月廿六日伏見より  
〜〜〜十二歳〜〜死す  
法名 玄法

正方

本居東門尉 生國徳也

祖父光成尉〜あひ〜子と

〜〜秀頼の許り〜

元和元年六月〜お〜



大権現よりいへりてくまのりそのら  
名徳院殿よりいへり

將軍家よりいへりてくまのりいへり  
秋友持はちが継りてくまのりいへり  
継の書よりいへり

良勝

今名は忠門尉 生國氏院  
長十五年

名徳院殿よりいへりてくまのり

寛永十七年十月十二日  
七条よりいへり

成勝

源太郎 生國氏院

寛永十二年

將軍家よりいへりてくまのり



正勝 まさかつ

市兵衛 生國 拾津

元和六年

台徳院殿より 禱 まご

寛永四年 乙酉 小姓 組の書と云ふ

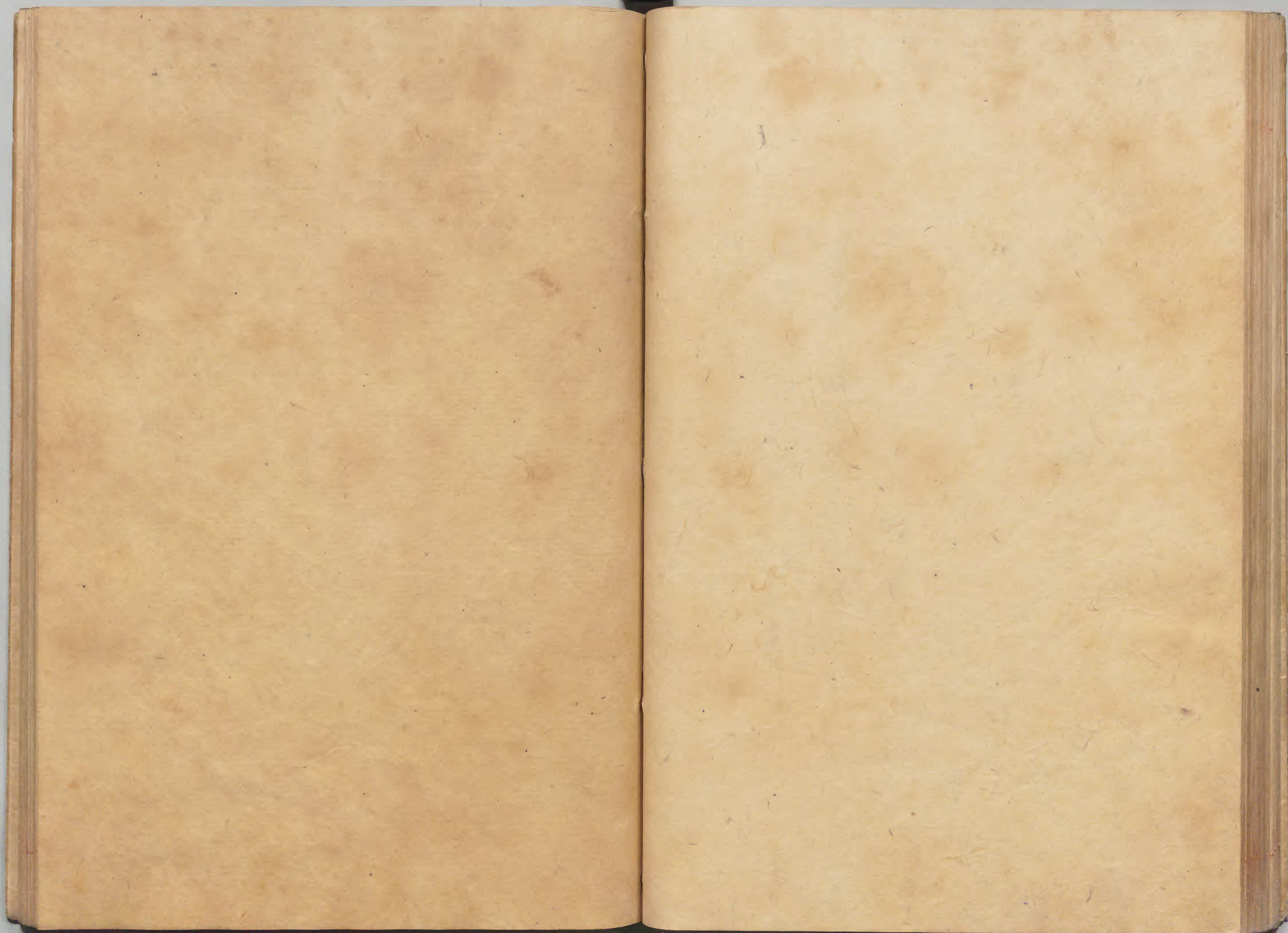
日九年 六月 乙酉 病氣よる

涉書とゆふと云ふ 翌年

山書 請の役と云ふ

家紋 友の丸







果

加  
友

新次郎

生國之河あらし

廣忠ひろたけ及

東照大権現よつとくをくほつら

之別あわかの郡ぐんよよとひく合あ戦いくさのこ

まま謀ま志しここなり軍いくさも歳としああて



討死

包秋こしゅう

新次郎 生國同前

大権現

名徳院殿ふつふつとくまら

与長まさ七子六月軍六歳少く

痛死 法名徳院とくゐん

通有とゆう

六右衛門 生國武勇

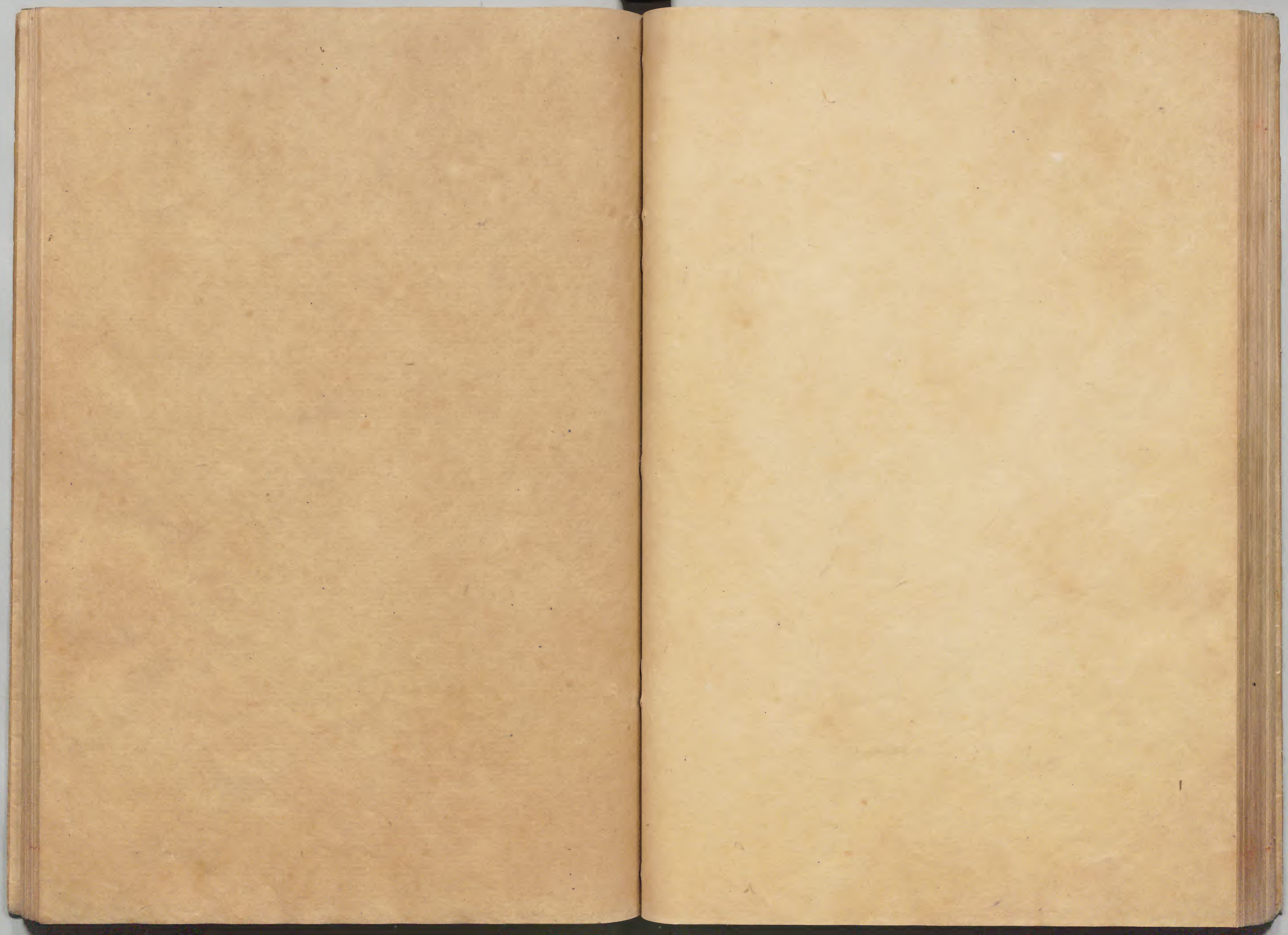
名徳院殿よつふまのりそのら

將軍家よりつふつとくまら

家紋

上友かみとも







● 某

加  
友

甚か  
右  
某

夫  
之  
河  
山  
中  
よ  
じ  
や  
う

清  
康  
君  
り  
つ  
ふ  
り  
は  
ら

正成

想  
た  
某

生  
國  
同  
あ



廣忠つりしはふまひに  
天正六年九月廿七日卒歳行て  
死す 法名永忠

正次

越市郎 後よ勅在東つこ号と

東照大指現

台徳院殿ふつふつとつて水鏡炮  
同心のよの軍人とあげけらる

永禄六年冬参列よとひく一向宗時  
越のよと小豆坂よと高名と均しり  
同玉計海合戦のよと高名  
同國和甲しとひく高名と均しり  
同八年乙列台田戦場よと徳氏  
あらしと病と均しり  
同牛窓合戦のよと徳氏河内と  
元龜元年乙列姉川合戦のよと  
高名一病と均しり



天正六年 駿列 を自 小 びく 首級  
と 止 一人 と け ころ  
同 十二 年 長 久 平 の 合 戦 小 名 かり  
の じく 八 ヶ 不 一 じく 戦 切 あり  
長 十四 年 八月 廿 四 日 七 十七 歳 小 せ  
死 せ 法 名 淨 哲

正信

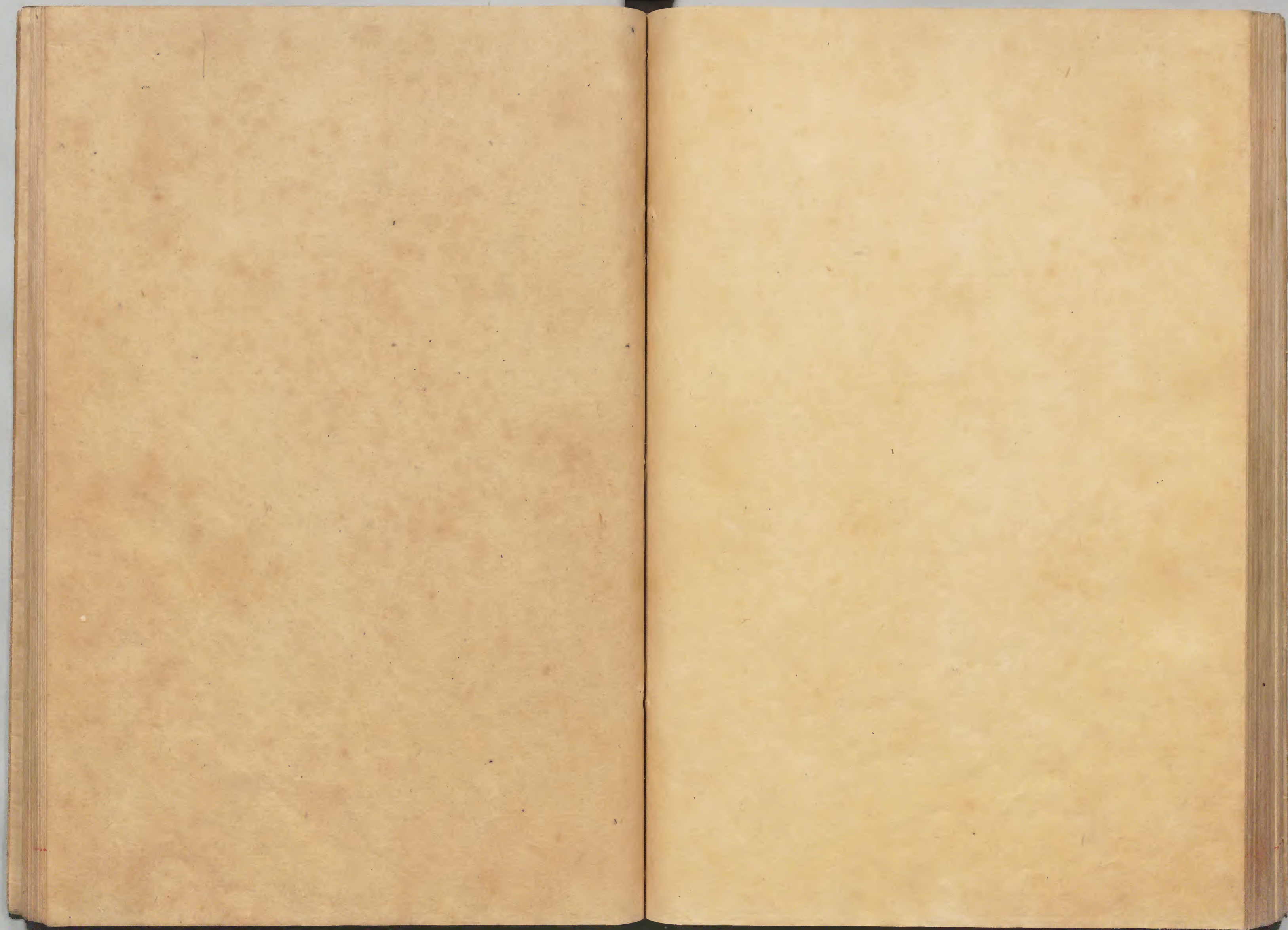
劫 在 東 へ 中 國 同 前

名 徳 院 殿 及

将 軍 殿 へ 一 つ 一 つ 一 つ 一 つ

家 紋 友 の 丸







京子後子

日記 生國同前

賴子京子

掃部子 生國之河  
清康子 君子 了子

加子友子



廣忠ひろたかつりつふまら

系元けいげん

古ふるたかたかつ 後ご橋はし磨らせせつつふふ

生なま個ご日にち前まへ

之これ列れつ安やす祥しやうよよらら 廣ひろ忠たかつつふふ

ううめめらら

東とう照しやう大だい権けん現げんりりつつふふままららふふ

之これ列れつ長なが崎さきりりつつふふままららふふ 浄じやう善ぜん乃のととはは

三さんじじ七しち十じゆ一いつ歳さい少しやうくく死しとと 法はふ名めい

宗そう業ごう

系親けいしん

之これ小せう郎らう ののらら久きう右う大だい中ちゆうああつつふふ

生なま個ご日にち前まへ

名な徳とく院いん殿でんりりつつふふままららふふ

寛かん永えい平へい年ねん以い戸こよよととひひくく六む十じゆ九きゆう歳さい

少せうてて死しとと



系重

久太夫 生國貞翁

寛永六年

將軍家よりつゝつゝつゝ

系派

助在東の 生國貞翁

信康之よりつゝ信康之墓

系名

長大夫 生國貞翁

寛永十六年

生海ひくのら法神一隠居

寛永六年のまわ

大権現より好福

日十一年 軍之歳に

法名浄安



名徳院殿よつゝなり大沙書院  
ほむむ

家紋

丸の内九字



菜

平菜ひらさい

中國同前

菜さい

掃帚ほうしゅう

中國同前

加藤かとう



正久

忠直 あきら 生國回 あ

清康 きよかみ 君 きみ 廣忠 ひろあきら 下 した 清康 きよかみ 下 した 清康 きよかみ 下 した

法名 淨蓮 じゆんれん

正重

市六郎 いちろう 生國回 あ

東照大権現 とうしょうだいこんげん 下 した 清康 きよかみ 下 した 清康 きよかみ 下 した

正直

与左吏 よさだ 生國回 あ

薩摩守 さつまのしゅ 忠直 あきら 下 した 清康 きよかみ 下 した 清康 きよかみ 下 した

法大納言 ほつだいなごん 義直 よしあきら 下 した 清康 きよかみ 下 した 清康 きよかみ 下 した

七十四歳 しちじゅうよんさい 下 した 清康 きよかみ 下 した 清康 きよかみ 下 した

法名 祐念 すけねん



正勝まさかつ

市左衛門 生玉なまたま後河

大権現

台徳院殿たいとくゐんとらび

將軍家しやうぐんよりつゝへつゝへとらび

水納戸みづのりなりとつとじ

正長まさちやう

傳つたふ高 中園なかつゆゑ氏うぢ義ぎ

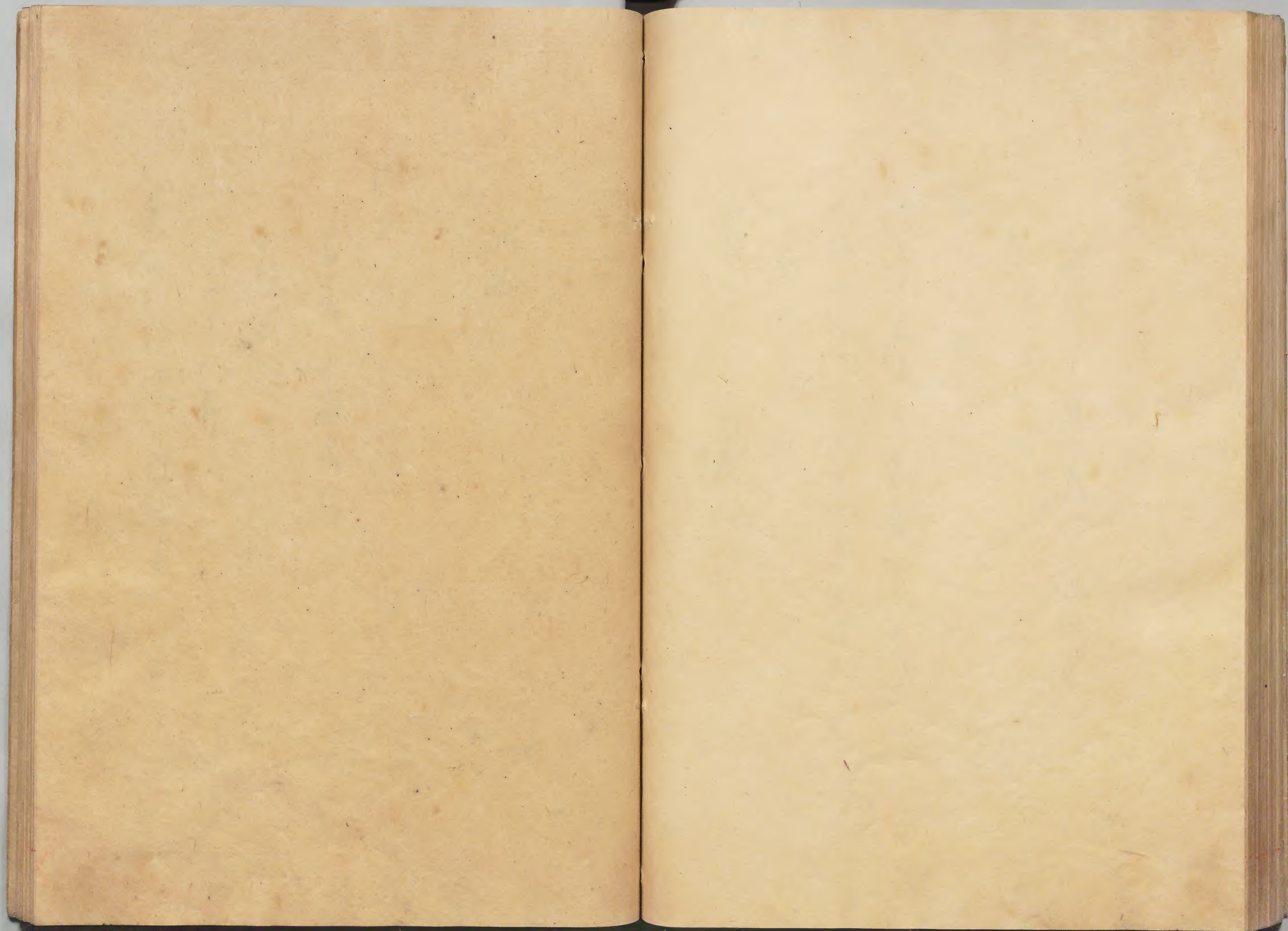
寛永十一年

將軍家しやうぐんより福ふくとらび

同十二年大津おほつ書かきとらび

家紋 下取しもとりの丸内まるのうちよ加よかの字







成者

加友

若翁 中國武翁

小條氏在り了

天正十八年

東照大権現より得しそのり

台徳院殿より了り了り了り



享長十二年より死

成沢

田原兵衛 生國日記

享長十二年

名徳院殿よりつゝくまら

成久

檀右衛門 生國日記

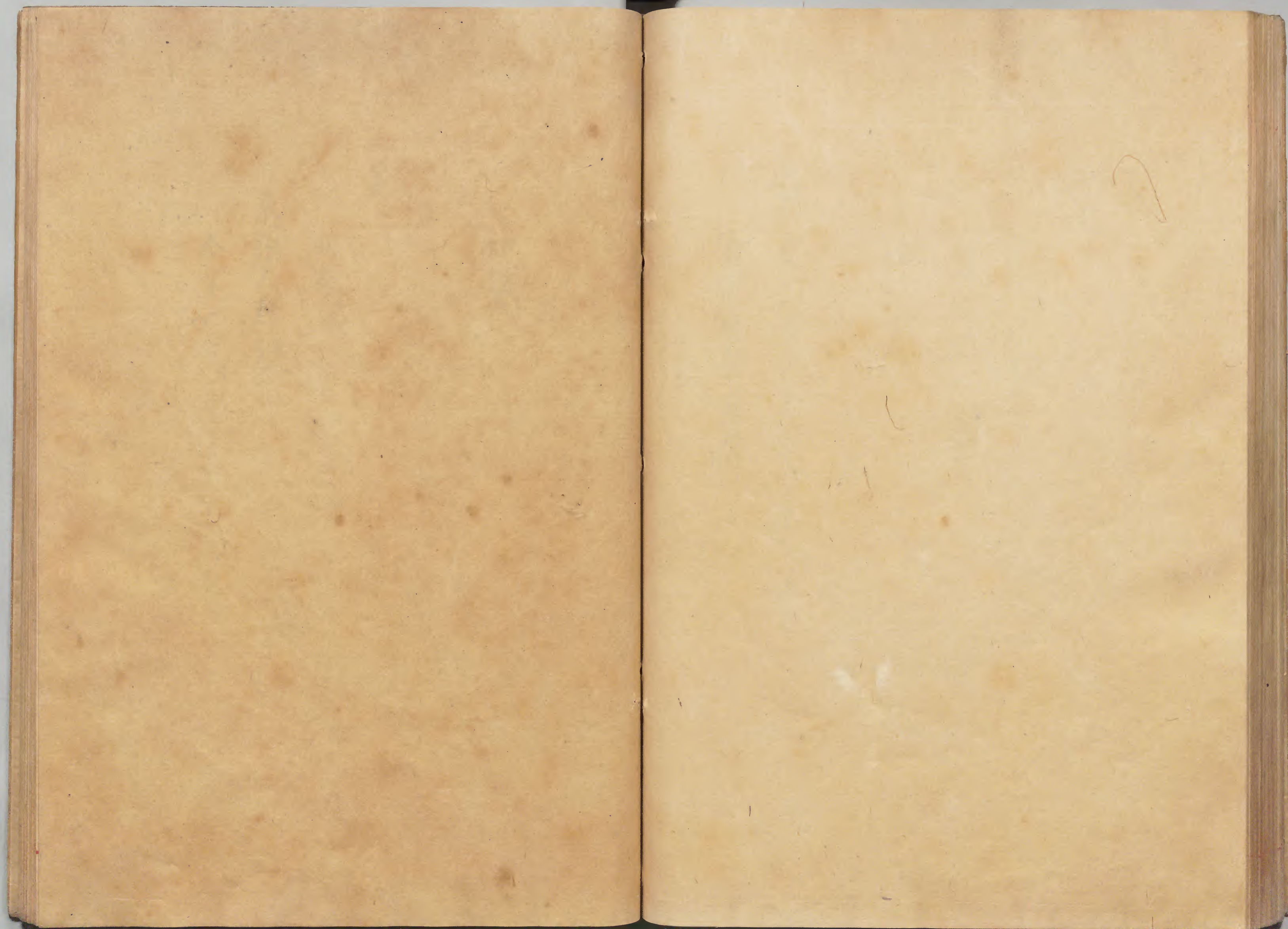
寛永十二年

將軍家よりつゝくまら

家の紋

友丸







● 集

加藤

加藤 生國

東照大権現

八十八歳



一義

平右衛門 生國同前

大権現

台徳院殿よりつゝ之くま

六十二歳ありて

一重

平右衛門 生國氏

台徳院殿

將軍家よりつゝ之くま

義休

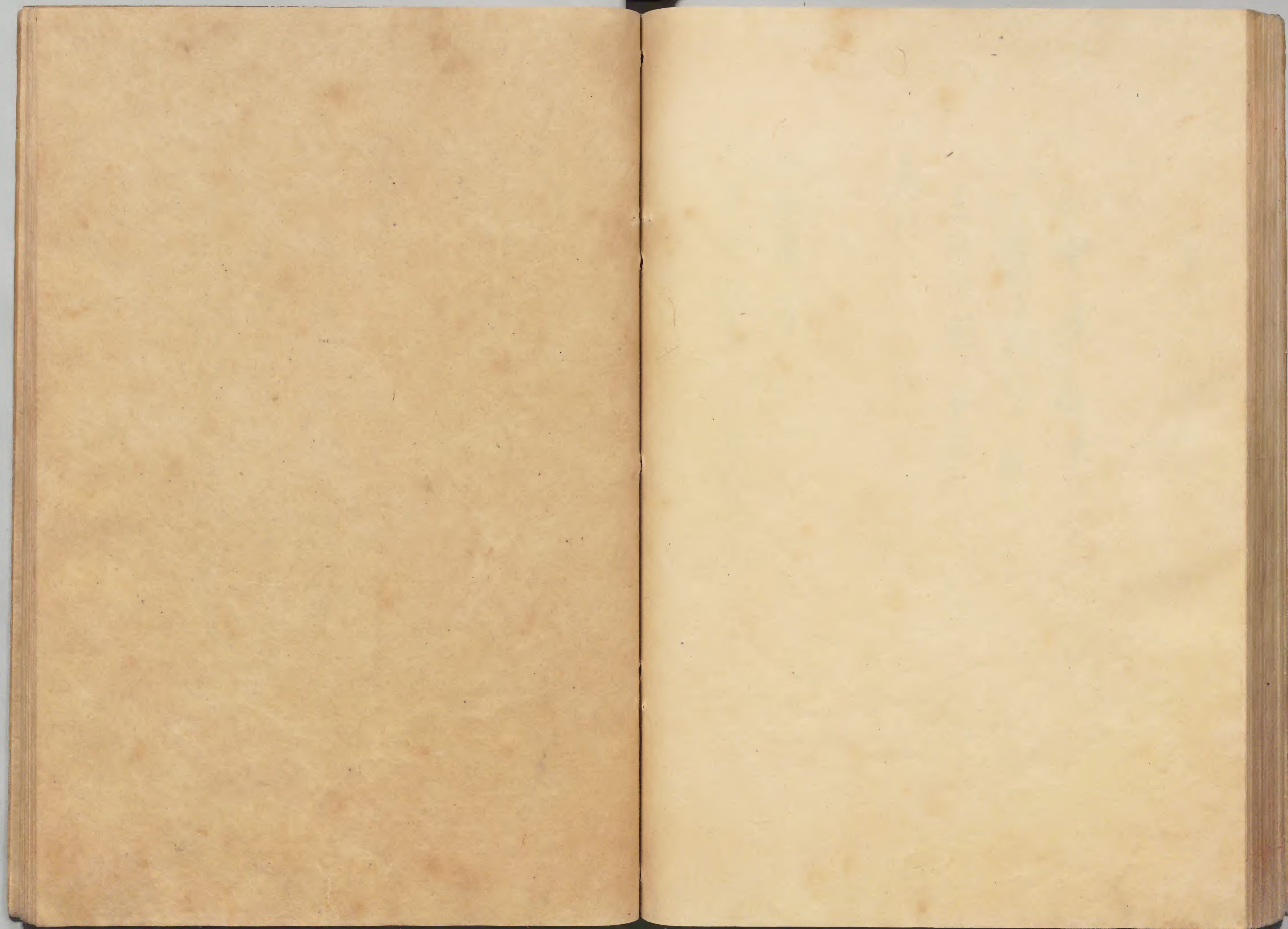
権十郎 生玉同前

寛永九年六月廿四日

將軍家よりつゝ之くま

家紋 下友丸







長房ちやうぼう

加藤かとう

惣そう長房

生國なまくに之河平

廣忠ひろちゆうつりつゝそのら

東照とうしょう人権現にんけんげんりりはく人にんなる



長次

新無束 生國日前

大権現

名徳院殿より

寛永二年六月十六日江戸より

とひく七十七歳より病死

法名 道清

長正

新無束 生國日前

元和六年行

名徳院殿より

寛永元年

將軍家より

長延

八右衛門 生國氏



寛永二年より

將軍家よりいへりかきまらり

家紋

下取の丸



加<sup>か</sup>敷<sup>し</sup>

克<sup>く</sup>重<sup>じゆう</sup>

若<sup>わ</sup>十<sup>じゅう</sup>郎<sup>らう</sup> 生<sup>せい</sup>四<sup>し</sup>之<sup>の</sup>河<sup>か</sup>

女<sup>にょ</sup>祥<sup>しょう</sup>崩<sup>ぶつ</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>

清<sup>せい</sup>康<sup>かう</sup>君<sup>くん</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>大<sup>だい</sup>若<sup>わ</sup>一<sup>いち</sup>郎<sup>らう</sup>と<sup>と</sup>た

ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup> 廣<sup>くわう</sup>忠<sup>ちゆう</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>

つ<sup>つ</sup>ふ<sup>ふ</sup>七<sup>しち</sup>十<sup>じゅう</sup>歳<sup>さい</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>花<sup>はな</sup>と<sup>と</sup>



元末

長十郎 生國回

廣忠つりつふりけりまは

東照大権現つりつふりけりまは

六十二歳ありて死す

元治

長十郎 生國回

大権現

名徳院殿つりつふりけりまは

六十二歳ありて死す

治次

甚之物 生國回

元和四年

將軍家つりつふりけりまは

寛永十年よ采地とたまふ



家紋

下<sup>さげ</sup>板<sup>いた</sup>の丸<sup>まる</sup>



● 菜

加友

想<sup>おも</sup>た<sup>た</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>の<sup>の</sup> 冬<sup>ふゆ</sup>河<sup>か</sup>山<sup>やま</sup>中<sup>なか</sup>よ<sup>よ</sup>じ<sup>じ</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>  
廣<sup>ひろ</sup>忠<sup>ただ</sup>つ<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>し<sup>し</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>ら<sup>ら</sup>  
東<sup>とう</sup>照<sup>しょう</sup>人<sup>にん</sup>権<sup>けん</sup>現<sup>げん</sup>し<sup>し</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>



台次

新出湯 生國同前

人権現

台徳院殿より

保次

八十郎 生國氏前

台徳院殿より

多のち 教命とあり 後河  
大納言忠長より

保貞

伴出湯 生國同前

寛永十年

將軍家より 好福より

日十二年 保次より 忠長より

領



家紋

下坂さかの丸まる



来

加友

之九郎 生國之河

東照大権現よりつゝさくまつり侍

小姓となりては後大西番とつゝ心



正重

之乃命 生玉後河

名徳院殿よりつるをくまうり大

清書とつる

正則

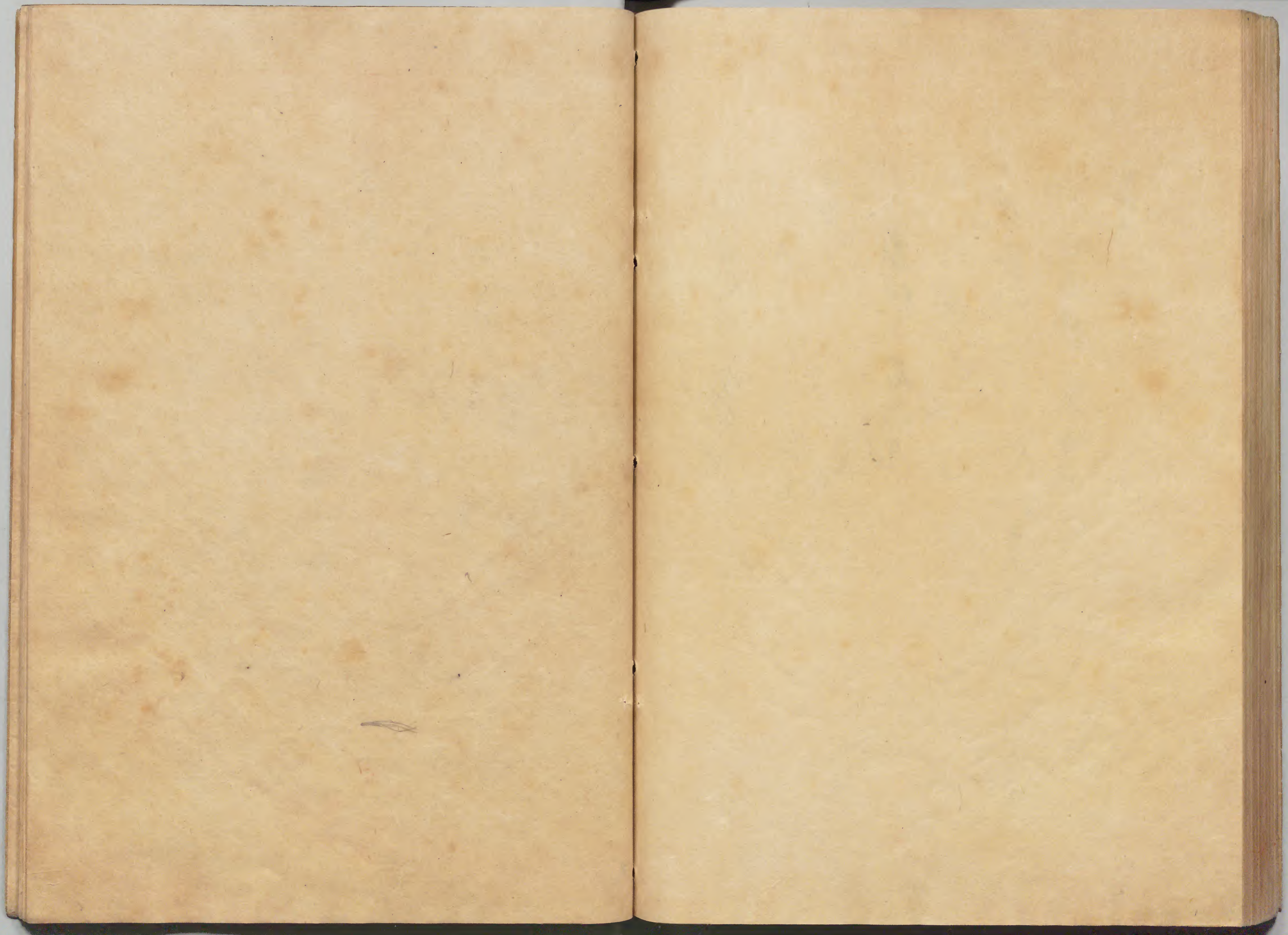
令ふ高 生國成務

將軍家よりつるをくまうり大書

とほまの館地とたふ

家紋 友の丸







● 忠京

加藤

右高木忠 中尾張

日長久之 子一信

織田信長 一信 一信 若崎の城

新居

天正十二年 長久平 戦場よ



討死

京正

檀右衛門 生國同前

東照大権現よりしりおがれしより

名徳院殿よりしりおがれしより

大坂毎夜の沙陣より信守すじつ

河部海守が継りありし者

級と好し

寛永七年八月六十二歳ありし  
病死

正重

清兵衛尉 生國氏

寛永十九年

名徳院殿よりしりおがれしより

將軍家よりしりおがれしより



正次

檀右衛門 日回江戶よじり

寛永十一年

將軍家より修へしむる

家の紋 九乃字



正安

加藤

之七郎 生國 冬河 山繩  
酒井 在忠 尉忠 次子  
天正 二年 長藤 合戦 の  
六条 所 討死



正忠

之太史 生國日前  
酒井忠次より修ふ七十九歳にして  
病死

正長

市大夫 生國日前  
くづめりて若派小大格より修ふ

正長七年

東照大権現より修ふ武列  
忠の涉城書より修ふ十一歳より  
病死 法名浄島

正勝

市大夫 武列忠より修ふ  
名徳院殿より修ふ  
寛永五年より武列忠の涉城書



とほむ

日十七年江戸よとひくし  
書とほむ

家紋

有丸 たらのま



長久

年いしのし物け 武ひ藏い江い戸へよしまん

長正

久ま太ま史し 生な國に之の河か  
とと波な山やま城しろ守のりががととららよよわわり

加藤



十日集のしるし

將軍家よりくまら

家紋

下取とがり



正則

片右有る元 生國を以

加友肥後守清正より了

享長八年 八月廿一日より了

加藤

中右片右と号して正方り

い〜〜〜加藤と〜〜〜



法名 淨心（すいしん）

正（ただ）方（かた）

右馬（みぎうま）允（のり） 生國（なつくに）日（ひ）前（まへ）

清（きよ）正（ただ）一（ひと）行（ゆき）之（の）日（ひ）姓（な）と（と）伊（い）右（みぎ）之（の）氏（うぢ）  
 片（かた）墨（すみ）と（と）何（なん）々（ざ）之（の）加（か）藤（ふじ）之（の）氏（うぢ）

正（ただ）直（ちか）

左（ひだり）内（うち） 生國（なつくに）肥（い）後（ご）

夕（ゆふ）書（か）之（の）書（か）々（ざ）

名（な）徳（とく）院（いん）殿（の）一（ひと）々（ざ）之（の）書（か）々（ざ）之（の）書（か）々（ざ）

其（その）の（の）書（か）々（ざ）

将（しょう）軍（ぐん）家（け）一（ひと）々（ざ）之（の）書（か）々（ざ）

家（か）紋（もん） 嶋（しま）酸（さん）草（そう）



